

講演1

原子力発電と私たち —福島事故と放射線の影響—

明治大学法学部准教授

勝田忠広



講演1では、明治大学の勝田忠広准教授に、いま国民に最も関心の高い「福島事故と放射線の影響」についてお話しいただいた。

工学博士で、かつて原発推進に向けて核融合を研究し、その過程で疑問を持ち原子力問題に取り組むようになった勝田准教授は、原発の推進と反対の両方の経験を踏まえ、福島第一原子力発電所の事故で飛び交うようになった言葉や放射線の影響について科学的見地を交えながら説明。また、原子力発電の構造的な問題について問いかけ、これからどうするかを自ら判断していく姿勢の大切さを訴えた。

日時：平成24年5月18日（金）13：30～14：45 場所：大手町サンケイプラザ 301～303号室

推進派と反対派を経験して

●ももとは「推進派」の立場

いまは原発についていろいろな本があり、福島事故以降テレビにもいろいろな人が出ています。

ただ、50年間以上に原発が導入されて以来、ずっと頑張ってきた人たちからすると、今回の事故は非常に複雑な気分です。私も正直、「負けた」と思っています。こういう事態を起こしてしまった責任を、私を含め、原発問題に関わってきた人は反省していると思います。

もともと私は「推進派」の立場でした。広島大学で核融合を研究していました。中・高校生の頃、チェルノブイリやスリーマイルの事故があり、何か環境やエネルギー問題に関わる仕事をしたいと思い、「夢のエネルギー源」と当時盛んに言われていた核融合にチャレンジしたわけです。ただ「核」という言葉があるからには、基本的に放射性物質や被曝の問題があります。それに大学院の修士課程のときに気づき、自分の中でも矛盾が生じていくことになりました。

初めて「反対派」の人を見たのは学生時代、夏休みの大学を借りて開催した学会発表のときでした。中庭で、本当に普通の、例えば商店街を歩いているような“おばちゃん”が、一人でビラを配りながら「核融合なんかやめてしまえ！」と騒いでいました。それまで私は、「核融合で人を救うんだ」と思って実験に明け暮れていたのです、そういう人の存在にびっくりしたのです。話しかけてみようと思って近づくと、もう一つ驚いたのが周囲の態度です。4～5人で私を止めて「あれは無視していい」と連れていかれました。

後で気になって、学会発表を抜けて中庭へ行くと、もうその人はいませんでした。落ちていたビラには、手書きで「被曝の可能性が増える」などと書いてありました。本当のことを言うと、核融合研究はそこまで至っていないところもありましたが、もし実現するとその可能性があります。だから、正しいこともあれば間違いもあるのですが、普通の人の視点で、生命とは何かということなどが書いてあったのです。私はそのチラシをいまだに持っています。それが最初の経験でした。

●「反対派」への転機

次に経験したのが博士課程でした。大きな施設で実験することになり、そのときもまだ「人を救う」と思っていたわけです。隅の方につきぎを着た若者から白髪交じりの人まで4～5人いるのが少し気になりましたが、実験できるのがうれしくて仕方なかったのです、助教授たちと打ち合わせをして待っていました。では実験を始めようというとき、その5人が、やれやれという感じで溜息を

つきながら立ち上がり、別の部屋へ入って行きました。その部屋は鉛製の厚さ30cmのドアのある部屋で、奥に実験装置があります。つまり、私の代わりに彼らが被曝リスクを負ってくれるということです。私はきれいなじゅうたん敷きの部屋でモニターを見ていればいいだけです。

人を救うと言いながら、結局その5人も救えないのだと気づいて、その場でつい、「なんだ、核融合ってこんなものなんですね」と言ってしまいました。そこでまた周囲の皆の態度が少し変わり、「そんなことはどうでもいいから実験しろ」と。私にとっては人の命のことだったのですが、それを「そんなこと」というのがひっきり、では科学者の責任とは何だろう、そういう疑問も私の中で悶々としてきたのです。

学位は頑張っ取りましたが、卒業後は何もできなくなって、広島でフリーターをしていました。せっかく学位を取ったのにこれではいけない、とすごく不安になっていたときに知り合ったのが、高木仁三郎さん（故人）でした。東京で原子力問題をやっていた人です。新聞で、それまで名前も知らなかった高木さんが海外の賞をもらったという記事を見たのです。受賞したのはライト・ライブリフッド賞。「もう一つのノーベル賞」とありました。レイチェル・カーソンなど、環境問題をやっている研究者たちがもらっている賞です。なぜ反対派の人が、しかも日本ではなく海外から認められたのか、不思議に思って電話をかけたのです。これをきっかけに、東京の原子力資料情報室で働くことになりました。だから、そこからの私の生活は「反対派」です。

原子力資料情報室というところは、資料が山のようにあって本当に大変な所でしたが、しばらく生活しました。そして、推進派と反対派の両方を見てきて、でもこのままでいいのかな、この2つを踏まえて自分にできることはないかと思っていったん海外に行き、いまは明治大学にいます。

そういう意味で、まだ私は途中段階ではありますが、今回福島事故が起きて、自分なりにきちんと対峙していこうと思っているところです。



原子力発電とは

福島事故については、巨大な科学技術の結晶が事故を起こしたというイメージがあると思います。でも実は、発電所で使われているウラン燃料がすべての問題の根幹だと思います。これが分かればすべてが分かると言ってもいいでしょう。

ウラン燃料は、最初は鉱物のウランです。山から削って汚れをとって焼き固めたセラミック状のもので、この直径・高さ1 cmの円筒形の燃料1個に、最初はウランしか入っていません。皆さんが聞く、セシウム、ヨウ素、ストロンチウム、プルトニウムは、実をいうと、これを燃料として使い始めて数年経つとできてくる物資です。

ウラン燃料はどう使うのか。石炭・石油は外から火をつければ、例えばやかんで湯が沸かせます。ウラン燃料の場合は、これ自体が熱を持ち、数千度くらいになりますから、やかんにチャポンとつけると中の水が沸騰する、これが原理です。

ここで問題が出ます。燃料は数年経ったら取り出しますが、プルトニウムなどいろいろな物質が入っています。プルトニウムは原爆の原料になりますから、簡単に捨てることはできません。しかも、取り出した後もずっと熱を持っています。水から出すとすぐ数千度になって溶けて、中のセシウムなど様々なものが出てきます。だから今回の事故では水のある・なしが問題だったのです。

燃料は、炉心から取り出したあとも水につけて

おくことになります。あるいは別の容器に入れて空気で冷やす方法もあります。これが最初のウラン鉱山の放射能レベルに戻るまでに、目安として10万年かかります。だから燃料は、使うとずっと残り、皆さんやリタイアした世代が使ったものを、今の世代や次の世代の人たちが電気料金の中で払いつつ処理していくことになります。よく政府の人は、世代間差別はいけないと言いますが、これに関してはすでに世代間差別が生じているのです。

福島事故とその現状

原子力発電について、福島を例に説明すると、外側の四角い建屋の中に炉があり、中に水をためて中心部に燃料をチャポンとつけている状態です。そこから発生した水蒸気でタービンを回して電気をつくります。

燃料の小さな円筒はペレットと呼ばれ、1個で一般家庭の1年分から1年分弱の電気をつくることができます。たった1個でそれだけの電気がつくれるのは、日本にとってありがたいことです。石油は、国際情勢で値段が変わったり、政治のカードとして使われたりしますが、核燃料は、1回つくれば数年間は使えるので、比較的安定しています。その裏返しとして燃料の廃棄や事故のリスクを負うことになりましたが、日本政府はこれを積極的に使ってきた背景があります。

この燃料を筒の中に入れて、それらをセットにしたものが燃料集合体という1つの単位です。今回の事故は、炉内の水がなくなったため燃料が露出して溶けたわけです。燃料を入れているさやがジルコニウム合金なので、熱で反応して水素が発生し、水素爆発が起きたという流れです。

このへんの科学的な話は、70年代の教科書にはだいたい載っています。福島事故が起きたとき、私は古い教科書を調べ、数時間後にはその後起こるすべてを予想できました。だからこそテレビで「分からない」と言っているのは何かおかしいと思いました。ただ推進派の人は、事故が起きたときの研究をすれば「お前は反対派か」と言われます。だから話せなかったのかもしれませんが。

燃料を炉の中で使ううちにできるセシウム、ヨウ素、ストロンチウム、プルトニウムは核分裂生成物といいます。この言葉は聞いたことがないかもしれませんが、平和問題や広島・長崎を知っている人は別の言葉で聞いたことがあるはずです。「死の灰」です。広島・長崎では多くの人が死の灰で苦しんでいます。原理的には、核爆発をゆっくり起こすのが原子力発電所といえます。

事故後、3月15日には水素爆発などの反応が終わっています。22日に「セシウムが福島発電所の敷地内で検出された」と発表されました。その時点で、燃料が解けた、それが外に出ていたということが、原子力を扱う普通の科学者なら分かります。セシウムは核燃料から人工的にしかつくれないからです。それ以外の原因は核実験しかありませんが、当時やっていませんから、原発から出たとは考えられません。政府は、22日の時点では、燃料が溶けたことを認めていません。確か4月に入ってからですから、そのとき、嘘をついていたことになります。現状として、いまもくすぶっていますが、事故の反応は15日に終わり、その時点ですべての放射性物質が出て、日本全国にばら撒かれて終わったと思ってください。いまここで測って何か出てきたら、それは15日ごろの反応で飛んできたものを測っていると考えてください。本当のことを言うと、15日までは外に出ない、あるいは経済的余裕があればなるべく遠くに行く、それが正しい判断だったということになります。

燃料が「溶けた」という話は、実はシミュレーションに過ぎず、実際は違う可能性はあります。ただ、普通に考えたら、手計算でも数時間後にこういうことが起きると分かるのに、政府がこれを出したのは9月、半年後です。しかも出した先は私たち国民ではなく、アメリカやIAEA（国際原子力機関）です。その分厚い報告書にさりげなく出しています。この政府の態度も疑問です。

放射線と人体への影響

●放射線のおおまかな目安

放射線について、おおまかな目安を話します。

普段、関東や東京で生活しているのであれば単位は μSv （マイクロシーベルト）、1時間当たりで約 $0.1\mu\text{Sv/h}$ です。福島第一内部の値を見ると、単位が mSv （ミリシーベルト）になっています。1 $\text{m}=1000\mu$ ですから1000倍です。普通は1年間の値で考えますが、福島第一は1時間でも大変な値です。「 m 」の単位はここで作業をする人や事故に遭った場合で、普段の生活なら「 μ 」です。

私が4月4日に福島第一の20km圏に行ったときは $0.5\mu\text{Sv/h}$ 、東京の約5倍です。11月に行ったときは、役所の人と一緒にだったので20km圏の中に入れましたが、まだ $0.5\mu\text{Sv/h}$ 。セシウムという物質は30年くらい経たないと減らないので、除染をしない限りこの値は続くと考えられます。

福島第一周辺住民は、約10万人以上が避難したことになります。今回の事故で直接的に死んだ人がいないからいいと言う人もいますが、私はやはり、結局10万人もの生活を変えてしまったことは反省しなければならないと思います。

●線量モニタリングをどう見るか

文科省の航空モニタリングによる線量測定結果が公表されています。山や風、雨の影響で線量に差が出ますが、初めてこれを見たとき、関東方面などは市街地が結構外れていると思いました。政府、文科省のデータだから意地悪な目を見たかもしれませんが、もしかすると都会でビルが多いから測るのを避けたのか、もしくは測ったけれどアスファルトが多いので流れていたのか、それは分かりません。東京でもホットスポットという言葉が流行りましたが、点々と見つかっています。

セシウム、ストロンチウム、プルトニウムについても測定結果が出ています。事故前、推進派と言われる人たちの間では、ストロンチウム、プルトニウムは重いのであまり飛ばないと言われていました。事故直後も、そんなに遠くまで飛ばないとはいわれていました。それが、結構離れた場所から検出されています。

このデータを見て、高い値の所を避ければいいのでしょうか。実は、これだけ広い環境中に放出され、それを測った経験は日本ではありません。

世界でも多分チェルノブイリくらいです。また、測り方も議論しながらやったものであり、言い方を変えれば、もっと丁寧に測ることもできると思います。だからデータに出ていないところは大丈夫と考えない方がいいと思います。

●食品からの放射能

もともと放射能とは、ある物質が壊れて不安定なものを放出することをいいますが、いまは放射性物質イコール放射能と表すこともあります。

食べ物から何ベクレル検出という話がよく出てきますが、もともと食物の中に入っているものだから気にしないでいいという意見もあります。確かに、例えば昆布の中に入っているし、人間の体にもこういう食べ物を通して入ってきています。

では気にしないでいいのかというと、それは別の話です。いま流通しているレベルなら、少し食べても急に何か起こるものではないと思いますが、食べていると溜まり続けます。また、どんどん食べるという世の中をつくることになり、管理する人も気が緩みます。やはり、駄目なものは駄目だと言うべきだというのが私の意見です。それに今回は自然に出たものではなく、人工的なもの、事故によって出てきたわけで、その責任の所在ははっきりしないのに、仕方ないといって食べていいのかという問題もあります。

年齢も関係があります。子どもを産んで、家庭も安定して、あとはリタイアするだけという人なら食べてもらってもいいかと思いますが、やはり子どもたちには食べさせない方がいいと思います。体が小さいのに臓器が大きいのであまり摂取しない方がいいというのがあります。また社会的な問題として、例えば子どもたちが結婚するとき、福島に住んでいたことが分かると相手方の親が気にかけてたりする、そういう差別をなくすためにも、例えば食べ物は全部私がちゃんと管理していましたから大丈夫だと言えるためにも、子どもたちの管理は別に考えた方がいいと思います。

もし放射性物質が検出される食べ物が出回っているなら、これは子どもの食べ物ではなく、大人の食べ物だ、という感じになるのがこれからの日

本なのかなと感じています。

●受けた放射線量が問題

よく、放射性物質を懐中電灯、放射線を光に例えます。わかりやすい例えですが、光と放射線には大きな違いがあります。懐中電灯を人に向けると光は体の表面に当たります。放射線の場合は体を突き抜けます。単に通り返るだけでなく、エネルギーが高くて小さいので、われわれの染色体を傷つけることがあるから問題なのです。

放射性物質について、覚えておくべきは、ヨウ素、セシウム、ストロンチウムの3つです。ヨウ素については、いま、食べ物から検出されたといった話を聞かないのは、半減期が短いからです。事故当初は、ヨウ素剤を飲むべきかと話題になりました。ヨウ素は甲状腺に取り込まれると放射線を出し続けることになり、半減期が短いから早く対応しないとイケません。セシウムは半減期が長く、筋肉に間違えて入ってしまい、体の内側から放射線を出し続けることになります。ストロンチウムはカルシウムと似た化学的性質を持っているので、骨に間違えて入って、ずっと骨内部から放射線を出します。そのためこの3つは非常に危険だと言われています。

放射線の人体への影響は、大きく2つに分かれます。身体的影響と遺伝的影響です。100mSvくらいになると、人体に影響が出てきて、ある一定以上になると、確実に死ぬことになります。なぜ死と言えるのか、それは広島と長崎の経験があるからです。一方、低いレベルで当たり続けるとどうなるか、私たちはまだ経験がありません。唯一の経験がチェルノブイリですが、20何年経ってようやく何か見えてきている状態で、それがはっきりしないまま福島事故が起きたのです。

影響については、急性障害はすぐ目に見えて現れます。晩発障害や遺伝的障害もあると言われていています。がんにしても、種類によって、何年後に発症するか、被曝した年齢によっても違います。だから一概には言えないのです。

そこで私たちが知るべきなのは、身体が放射線を受けたときの線量です。これを「実効線量」と

いいですが、実効線量を出すためには、体のどの部位に当たったのか、何が当たったのか、フォトンなのかアルファなのかといった情報が必要です。これらが分からないと、「あなたは安全です」などは本当は言えないはずです。その人個別に調査してようやく分かる話だから、「直ちに影響はない」というのは怪しい表現だし、全部ひと括りにして大丈夫というの言い過ぎだと思います。

●続く食品・飲料水の汚染

野菜や飲料水、乳製品や肉類でも汚染が次々と明らかになっています。3月19日には原乳から出たという話がありました。チェルノブイリや過去の事例では出るのが数年後だったから、何かの間違いかなと思ったくらいです。原因を追っていないのではっきり分かりませんが、牛が放射性物質をそのまま吸ったのではないかと思います。そして野菜で出ているのは付着したものです。

今後は食物連鎖で問題が難しくなります。植物を食べた動物、魚でも体の内部に放射線があるという状況がこれから出てくるはずですよ。

魚については、「福島事故は海のチェルノブイリ」と言う人がいるくらいですが、状況が分かりません。個人的には、海底の土からセシウムが検出されているのは厄介だと思います。海の底の土の除染など恐らくしないし、海底の土はあまり移動がないからです。

食物からは、約1年後の時点でも、数百件検出されている現状もあります。

●影響はまだ不明だが

人体への影響についても、まだ分かりません。福島県は、健康管理調査を行ったと大々的に言っていますが、問診票による記録であり、12月11日の時点で回収率18%。最近もそんなに増えていないと思うので、これを調査と言っていいのか、個人的には不安です。ただ、フランスの人と議論したときに、「18%でも多い方だろう」という話もありました。やはりこういう調査では、なかなか100%のデータは得られません。

逆に言えば、不確定要素がたくさんある中で議



論していかないといけないのに、例えばテレビという政府、事業者などからの報告では、「大丈夫」「きちんと調査しています」という話ばかりです。「みんなが不安に思うからこういう数字は言わない」では、いつまで経っても国民は育たないと、私は政府の人に言っています。オープンにして、答えは皆で決める形にしないと、いつまで経っても、出された情報を見て信じるしかない状況を繰り返すことになると思います。

文科省が出した、児童生徒等が受ける線量レベルも話題になりました。一つの基準は1 mSv以下です。この数字は、先ほど東京が0.1 μ Svくらいと話しましたが、それが平均だと思ってください。0.1 μ Svは1時間当たりなので、1日で24 μ Sv、1年間がおよそ870 μ Svなので、大まかに1000とすると、1000 μ = 1 mだから年間1 mSv。これが事故前の自然界の基準です。それを、はじめ文科相は20 mSvとしたわけですよ。20 mSvは、放射線の作業所の人たちが考えるレベルです。子どもたちは細胞の動きが活発なので避けないといけないし、背が低いので地面からのセシウムを吸いやすい。それらを考えると、やはり良くない値です。

このとき私が感心したのが、母親たちが反対したことですよ。福島とは関係ありませんが、水俣病もそうでした。当時、体内の子どもには伝わらないというのが学者や政府の意見でしたが、母親たちが、自分の子に何か起こるかもしれないと、徹底して政府と戦い、最終的には科学的にへその緒を通じて子どもに影響を与えることが分かりまし



た。生命を扱う人の直観に驚かされる思いです。

●生活の中の放射線、がんのリスク

これまでに、日常生活の中の放射線を示した図などを見た人もいます。例えば、「あるレベルの放射線を浴びた。でもそれは東京・ニューヨーク間を飛行機で飛ぶのと同じくらいだ」と、放射線は浴びても大丈夫という表現に使われていました。本当に同じかということ、もちろん嘘です。放射線の数字だけ見たら確かに同じですが、そもそもメリットとリスクの兼ね合いで、わざわざ自分でお金を払い、ある程度浴びてもいいということで飛行機に乗ります。事故によって意図せず浴びるのと比較されるのはどうかと思います。

また飛行機の宇宙線からの被曝の場合、フライトアテンダントなどの女性は線量を管理されています。管理していないのは日本くらいだと思います。つまり、飛行機に乗れば浴びるのだからいいでしょうと言えようなものではなく、これはこれで問題を抱えたものです。その話もなしに、簡単に話を進めようとしているという意味で、私は、これは嘘だということです。

X線も同じです。X線自体、それなりのリスクを伴うものだし、自分のことを知りたいから引き換えに受けるものであって、事故の放射線と比較されているという話ではありません。また、海外では規制があります。真面目に年1回健康診断を受けるのは日本などごく少数で、これと比較するのも本当におかしな話です。

がんのリスクも、情報が飛び交ってよく分からなくなっている話です。政府、テレビなどのマスコミが大丈夫だという根拠は国連科学委員会の値です。「10mSv浴びたときの100万人のリスク」の値として死亡が100例です。これを見て、10mSv浴びても1万人に1人死ぬリスクがあるだけ、というわけです。大方の人がこれで安心しますが、残念ながらそんな簡単な話ではありません。違う人がやればやるだけ値が変わるのがこの例で、アメリカ科学アカデミーの値は、がんの死亡者ではなく発病者だから違うし、「反対派」と言われる人たちの報告は、桁も違います。誰が正しいかは何とも言えないところです。

だから、国連科学委員会の話だけ見てこれが正しいと言うのは、全部を説明していないと思います。そしてこの委員会自体、政治的な問題をいろいろ抱えている所でもあります。

事故を踏まえて描く未来とは

●事故が起こらなければいいのか

福島事故を軸に話してきましたが、では、事故が起こらなければいいのかを考えます。

電力会社のホームページやパンフレットを見ると、だいたい、モニタールームなどの写真で「核を扱うので安全に管理しています」というイメージを見せ、原子力発電は二酸化炭素を出さないからクリーンなエネルギーと表現し、電気がなくなったら大変だと訴えます。

でも実際は、写真資料に「被曝労働者」と書いてあるように、燃料を入れた炉心にも人が出入りしています。彼らなしには原発は動かせません。そして福島事故でも見えてきた話ですが、例えば、作業をする人はわざと線量計のバッジを付け忘れてきます。線量が一杯になると1年間働けず、お金が入らなくなるからです。現場のボスも黙認します。なぜなら、作業する人が多いほどピンハネする収入も多いからです。また、作業後は、放射性物質が手に着いていると外に出られないので、シャワーを浴びて、モニターで見て、を繰り返します。たまに、なかなか取れなくて「今日は

外に出られない」と半泣きになる人もいます。こうした問題もあります。

原発問題を議論するとき、よく原発か風力か太陽光かという話をします。その議論も大事ですが、そもそも原発というのは、差別的な構造、利権が集まりやすい構造、また、一部の科学者が特権階級となって「あなたたちは知らなくていい。難しいから私たちが考える」というテクノクラートの構造をつくってしまいがちである、それが原発というものではないかと思えます。

そして「原発は事故が起きたら危ない」と言います。確かにそうですが、私は、もしかしたら、事故が起こらなかつたから問題が明るみに出ないままずっと続くので、それも怖い気がします。

●原発は核燃料サイクルの一部

「核燃料サイクル」というのがあります。推進派は「核」という言葉を使われたくないで「原子燃料サイクル」と言います。いまでは新聞も「核燃料」と使うので、彼らの努力はあまり報われていない感じです。核燃料サイクルとは、燃料の流れを表しています。ウラン鉱山で採掘して、燃料をつくって使うことになりませんが、原発はこのサイクルの一部に過ぎません。そして、このいろいろな段階で問題を起こしています。

まず採掘の段階で被曝が生じます。日本はウランをオーストラリア、カナダから輸入しているので、間接的に被曝者を出していることになりまふ。だから、日本は唯一の被曝国、というのは言い過ぎだと思えます。

燃料の濃縮段階では、濃縮技術を進めていくと核兵器になります。イランがそれをやっけて、「日本がやっけてるのに何でやっけてはいけなひのか」という口実になっています。そういうセキュリティや国際政治の問題も孕んでいます。

燃料を使った後の使用済み燃料は、そのまま捨ててほしいのですが、日本はそこからプルトニウムを取り出すと言っています。それを行う再処理工場は、トラブルでまだ動いていません。ここで何をするかという、福島事故では燃料は事故で溶けましたが、再処理工場では人工的に溶かし

す。溶かしてプルトニウムだけ取り出し、新しい燃料に入れる。リサイクルだからいいだろう、というのです。これは、実は核兵器をつくる技術と一緒に、長崎型原爆と同じです。この技術を持つのはアメリカ、イギリス、フランスの核兵器保有国です。日本は核兵器保有国ではありませんが、持つことになるので、世界に間違ったメッセージを与えています。

取り出した後の廃液は、固めて、300m位の地下に捨てます。10年後くらいには実施の予定ですが、どこに捨てるのか決まりません。嫌なことだから、どの自治体も手を挙げないのです。

このように、燃料の流れを追うだけで、いろいろな問題が見えてきます。原発はこの流れの一部でしかないことも知ってほしいと思えます。

●「どうするか」を考える

私はいろいろところで原子力発電所の問題点について話してきましたが、今回の福島事故によって、ようやくその問題点が一般の人々の前に出てきたように感じています。燃料が溶けて放出されたのはだいたい10%。10%でこの大騒ぎですが、まだ90%は内部にあります。すなわち社会的な問題、政治的な問題、様々な問題も、実はまだ数パーセントくらいしか出ていません。だから本当に根が深いものだと思います。

事故が起きたときの質問は、これからどうなるか、どこに逃げればいいか、というものばかりでした。残念ながら事故はもうある意味終わっているので、「どうなるか」ではなく、これからは「どうするのか」です。大変ですが、自分で判断する状況にきています。これは別に悪いことではありません。これをきっかけにして進まないといままでと変わらないし、それをするのが福島から学ぶ、あるいは福島で苦しんだ人たちに貢献することだと思っています。だから、推進反対など、簡単に言えることではないし、大丈夫、安全と言うのもおかしいと思えます。じっくり考えてほしいと思っています。